

The Reeve's Tale におけるチョーサーの演出的写実性

玉川 明日美

はじめに

John Dryden はその著書 *Fables, Ancient and Modern* の序文の中で、Geoffrey Chaucer を “the father of English poetry” と呼び、その言語的なセンスと知識を讃えた。Dryden はまた、*The Canterbury Tales* を取り上げて、その登場人物の多彩さにも言及した。¹ だが、Chaucer が彼の深い人間観察眼と、それを表現するセンスを発揮したのは語り手である巡礼者たちの描写のみに限らない。巡礼者が語る物語の中の登場人物たちにも、語り手自身の性格が反映されつつ、その人物が実際に生きていたのではないだろうか、と思わせるほどの緻密な性格描写がなされている。

しかしここで、Chaucer が 19 世紀以降の写実主義を先取っていたような、現代的なセンスの持ち主だと評価するのは早計であろう。A.C. Spearing は、Chaucer の “realism” は、19 世紀的なあるがままの現実を描いたものというよりも、上層階級の、下層階級に対する視座に基づいたものである、と興味深い指摘をしている。² また、J.R.R. Tolkien の言葉を借りれば、それは “dramatic realism” という、自然主義的な描写とは性質の異なる写実性である。当時の文学は写字生によって羊皮紙などに筆写され、その写本を読まれるに限らず、宮

廷や上流階級に属するパトロンたちの前で朗読される、という中世文学の特質である口承性の一面をもつ。このことから、Chaucer は聴衆を念頭において、その人物描写にあやを加えていたことも想像に難くない。しかし、だからと言って Chaucer を〈中世の文人〉という枠に当てはめたまま評価することも適切とは言えない。むしろ、*The Canterbury Tales* というテキストを詳細に分析し、現代においても読者に感銘を与えるような、時代の枠にとらわれない Chaucer の技巧を評価すべきではないだろうか。

Chaucer は *The Canterbury Tales* において、ロマンス、聖人伝、説教など様々なジャンルの物語を編み、その中にはファブリオー（滑稽譚）と呼ばれる物語も取り入れた。*The Reeve's Tale* もファブリオーに分類される。もともとファブリオーは 12、13 世紀頃にフランスで流行した文学様式であり、*The Reeve's Tale* の底本になったと考えられている古仏語のファブリオー作品、*Le meunier et les .II. clers* (『粉ひきと二人の学僧』) には、*The Reeve's Tale* と類似するプロットが見られる。³ この古仏語のファブリオー作品には *The Reeve's Tale* と同様に、粉挽きとその妻、娘、そして二人の学生が登場するのだが、特に個人名がつけられているわけではない。しかし、Chaucer はそれぞれの登場人物、特に物語の中心となる粉挽きと学生二人に、名前やより詳細な設定を加えている。そして、Chaucer の人物描写の精妙さはプロットや地の文における描写のみならず、その登場人物の科白における文体的特徴にまでも及んでいた。

イギリス北部出身の学生たちの科白に用いられている北部方言などは、その一例として挙げられよう。この北部方言の使用の目的は、単に彼らの出身を表現するためだけではなく、実に多様な効果が意図されていると考えられる。また、方言の使用に限らず、それぞれの登場人物の科白に見られる語彙の使用のタイミングや頻度、慣用表現、文法等がすべてが相俟って、その人物の性格形成に与している。このような綿密な登場人物の人格設定と表現が、この物語をより現実的でありながらも劇的なものとしている。そして今現在までも人々に読み継がれ、Chaucer を “the father of English poetry” の名を冠するに至らしめることへ貢献していると思われる。

このように *The Reeve's Tale* は、類似した他の物語のプロットに基づきながらも、Chaucer が自身の言語的センスを遺憾なく発揮して発展させた物語である。これまで多くの研究者がそうした特徴をもつ本作品に注目し、考察をおこなっている。とりわけ、*The Reeve's Tale* についての主たる関心は、本作品における北部方言の使用に関するものであった。Charles Muscatine は *The*

Reeve's Tale に関して、

“The most interesting stylistic elaboration in the poem is the naturalistic Northern idioms of the two clerks. . . It is a convincing artistic imitation, based on outstanding characteristics of the dialect. It is the first of its kind in English, and unique in Chaucer.” (199)

と述べ、北部方言の使用が当作品の文体的精巧さに寄与することや、方言を利用した Chaucer の独自性を指摘している。Spearing も学僧二人に関して、北部方言の使用が彼らを最も特徴付ける要素とし、方言をそのように使用したのは Chaucer が先駆者だと述べている。⁴しかし、Spearing は、方言使用にのみ注目し、方言の使用による“comical”な演出が随所になされている、という指摘に留まり、登場人物の人格形成と方言使用との具体的な相関関係については考察していない。しかも、物語の展開において特に重要な John と Alayn の個別性については、それぞれの行動における違いを言及するのみである。

この他に登場人物の描写に関する指摘は、*The Reeve's Tale* で多く用いられている動物に関する比喩表現や、外見的特徴、行動から推察されるものも多く、行動に限らず登場人物の科白全体にまで着目した、包括的な論証はなされていない。登場人物の性格を考察する場合、外的な要因である社会的な設定と共に、内的な要因、つまり登場人物の心理の発露としての行動と科白による相関性や一貫性に対する視座は必要不可欠であろう。本論では、各登場人物の外的な設定、行動と共に科白にも着目して、それぞれについて詳細な言語的分析を行う。また、そうした言語表現と、*The Reeve's Tale* のファブリオーというジャンルとの関係性についても考察することで、従来の主観的・印象的な本作品についての評価を再検討する。

1. Symkin

参考になると思われるので、*The Reeve's Tale* に類似したプロットを持つ、古仏語のファブリオー、*Le meunier et les .II. clers* のあらすじについて以下、紹介しておく。パン屋を営もうと考えた二人の貧しい学僧を騙して、粉挽きの夫婦は彼らが持ってきた小麦と馬を盗んでしまう。しかし、持ち物を無くした学僧二人を家に泊ませたことによって、粉挽きは大切にしていた娘と女

房を彼らに寝取られ、更に小麦と馬を盗んだことが発覚して懲らしめられる、というものである。Giovanni Boccaccio の Decameron にもこのファブリオーと類似した物語が収められており、Chaucer が *The Canterbury Tales* を制作する前に大陸へ赴いた際、このファブリオー自体や他の類似した物語、または Boccaccio の作品に触れて、*The Reeve's Tale* の構想に関するヒントを得たと考えることもできるだろう。⁵

1.1. 外的設定による Symkin 像

当時、中世ヨーロッパの粉挽小屋の使用料は物納であった。荘園内の領民が持ってきた穀物の一定量が荘園領主に納められるために差し引きされ、粉屋はそこから取り分を得ていたとされている。⁶ *The Reeve's Tale* においても、Symkin は “Greet sokene. . . With whete and malt of al the land aboute” (荘園内全域の穀物や麦芽の粉挽きに関して…大きな独占権) (3987-88) を持っていたと描かれている。そのような粉挽きの収入に関する性質から、*Le meunier et les .II. clers* や *General Prologue* 内で語られる粉屋のように、穀物を盗み取って私腹を肥やすような粉挽きが存在し、そしてファブリオーの中では庶民的な敵役の一人として描かれていた。*Le meunier* の粉ひきには、特に詳細な人格が語られていることはなく、学僧二人を騙して穀物と馬を盗むという行動自体から、彼の小悪党的な面を判断するしかない。つまり、極めてシンプルな見たままの人物、わかりやすい人物像でしかない。しかし、Chaucer は *The Reeve's Tale* において、この粉挽きのイメージに様々な肉付けをし、ただの物語内の一悪党という役から、〈粉挽きの Symkin〉という一人の人間に仕立て上げているのである。

地の文や他の登場人物によって語られる Symkin の人格や設定について、大まかに見てみる。Symkin の性格を端的に表しているのが、“As any peacock⁷ he [Symkin] was proud and gay.” (彼 [シムキン] は、クジャクのように自尊心があり、派手だった。) (3926) という一文である。多数の刃物を所持していることや、殺人や盗みもいとわない粗暴さも語られ (3929-40, 3957-60)、物語の後半で John も、Symkin は “a perillous man” (危険な男) (4189) だと語っている。更に、自分の “yeomany”⁸ (3949) という地位と、不正な横領も厭わぬ粉挽業による経済的な余裕、腕力の強さに裏付けされた高慢さを持った人物ということも語られている。Symkin の傲慢さを更に印象付ける事項として、彼は自分

の妻には教養と地位のある女性を望み、“noble kin”である司祭の娘と結婚し、その家族と“blood allye”（3942-50）を結んでいる。娘の Malyn には、血筋に値するような相手と結婚させようと考えており、彼の“noble”に対するこだわりが見て取れる（3973-86）。

しかし、詳細にわたるとはいえ、これらの外的な設定と、そこから導かれる Symkin の性格は、あくまでも、*The Reeve's Tale* 内における彼の「敵役としての粉挽き」という役割に具体性を持たせているに過ぎない。この外付けされた性格が、聴衆にとって現実味を帯びたものとなるには、Symkin 自身の言葉や行動によって裏づけされなければならない。

ヨーロッパでは中世期、学僧などの教養人と町人など非教養人の間には対立があった。よく知られているように、イングランドでも、Oxford で学生と町人達との間に諍いが起り、その結果、Cambridge に Oxford を追われた学者や学生が住み着き、こうした人たちにより講義が行われるようになった（1209年）。*The Reeve's Tale* の舞台である Trumpyngtoun はこの Cambridge の近郊にあり、登場人物の John と Alayn は Cambridge にある“the Soler Halle”に所属している。Cambridge でも学生と町人の対立は続いていた。対立の原因に、学生が街での飲食に関する金銭トラブルや、学生間の派閥争いの波及、町人達の学生達に対する余所者意識もあったと言われている。⁹ 学生達の振る舞いなどが原因で町人との間にできた溝もあるが、根本には教育の有無による社会的な評価の格差も両者の間に対立感情として横たわっていただろう。*Le meunier et les .II. clers* には町人である粉挽きと学僧二人の間に、はっきりとした対立感情や教養の有無に関する言及は無い。しかし、町人と学僧のそれぞれが自分の知恵を使って相手を騙しながら、損得を取り合う展開の根底には、両社会的階層間の対立感情があったことが仄めかされている。

Chaucer は当時の人々の間に流れていた社会的な感情の流れを捉えつつも、町人と学僧が持つだろう、紋切り型の感情を描くだけにはとどまらない。Symkin の行動や発言からは、学僧に対する複雑な感情を、内容と共に、文体的な特徴からも読み取ることができる。

The Reeve's Tale は、Symkin が“the Soler Halle”というコレッジから製粉を依頼された穀物を、大量に盗み取った事件が発端となって、学僧の John と Alayn が Symkin を訪ねることから物語が展開していく。以下の引用は、

Symkin が委託された穀物を盗み取り、それに対してコレッジの学長が怒る場面である。

And nameliche ther was a greet collegge
Men clepen the Soler Halle at Cantebregge;
Ther was hir whete and eek hir malt ygrounde.

.....

For which this millere stal bothe mele and corn
An hundred tyme moore than biforn;
For therbiforn he stal but curteisly,
But now he was a thief outrageously,
For which the wardeyn chidde and made fare.
But therof sette the millere nat a tare;
He craketh boost, and swoor it was nat so.
(3989-4001)

“moore than biforn”と次の“For therbiforn he stal” (3997) から、Symkin は前々からコレッジの穀物を盗み取っていたことが窺える。ここで注目すべきは Symkin が穀物を盗む様子を修飾する、“curteisly” (3997) という語である。¹⁰ 古仏語由来の単語であり、現代英語の“courteously”の元になった「丁寧さ」や「礼儀正しさ」を表現し、“court”を含むことから察せられるように、宮廷における礼儀作法を起源とする。“stal”という動作や“theef”という性質には、古英語由来の単語を用い、Symkin の粗野な姿を描きつつも、彼が“noble”にこだわり、模倣しようとする一面が垣間見える。Symkin の犯行に対して、穀物を盗まれた学長が“chidde and made fare” (不満を言い、がなった) (3999) と続くが、“chidde”や“made fare”は古英語由来の単語である。語義は両単語とも不平や憤りを表現することから、同義語反復 (tautology) であると考えられ、意味の強調がされて、学長の憤りの強さを伝えている。“made fare”に関しては、「大声で不満を述べる」という意味があり、語の起源も相まって、“curteisly”のもつ上品さとは相反する。この場面では、“stal”という行為にもかかわらず、宮廷風の動作を気取る町人の Symkin と、教養人でありながら、上品さや理性を欠いて Symkin を罵っている様子の学長が対比になっており、両者の対立と共に、所作と職業柄の不整合さが際立っている。しかし、このよう

に気取った様子が描かれながらも、学長の怒りを受けて平然としつつ、逆に“craketh boost”（荒々しく怒鳴り散らす）（4001）様子は、Symkin の“curteisly”が生来のものではないことや、彼の力強さに裏づけされた不遜さを目立たせる。“craketh”は古英語由来、“boost”はアングロノルマン語由来の同義語であり、これらも同義語反復と言える。同様の同義語反復で強調された学長の不平不満のがなりに対抗する、Symkin の生来の粗野さが強調されているといえよう。

1.2. 使用語彙の由来別分類による分析

ある人物がいかなる語彙を用いて話すか、ということは、彼、もしくは彼女の知的レベルや、性格的な語彙の選択を示すマーカーとなり得る。また、語彙の由来や使用頻度を分析することで、その作品の性質や、作者が作品に特定の雰囲気や効果をもたらそうとする意図を探ることもできる。本論では、主に科白内で用いられる語彙がもたらす、登場人物の性格形成に着眼して分析を進めたい。分析の対象とした語彙は、一般的に内容語と呼ばれる、一般名詞、動詞、形容詞、副詞である。Symkin と John、Alayn、それぞれの科白を抜粋し、その中で使用されている語彙を由来別に分類、使用頻度別にまとめたのが以下の表である。¹¹ Symkin の妻と、娘の Malyn は発言数が少なく、確たる論証に結びつくに至らないため、本論における *The Reeve's Tale* の登場人物の性格形成の分析の対象からは外している。

表 (1)

	OE	OE/OF	OF	AN	L	ON
Symkin	84 語 / 32 行 :1/0.4	5/32 :1/6.4	26/32 :1/1.2	3/32 :1/10.7	0/32 :-	2/32 :1/16
John	125/50 :1/0.4	1/50 :1/50	21/50 :1/2.4	1/50 :1/50	0/50 :-	16/50 :1/3.1
Alayn	140/46 :1/0.3	1/46 :1/46	12/46 :1/3.8	3/46 :1/15.3	0/50 :-	7/46 :1/6.6

(OE: Old English, OF: Old French, AN: Anglo-Norman, L: Latin, ON: Old Norse)

それぞれの統計結果から比較してみると、三人が共通して、本来語である古英語由来の語彙が発言の構成比の中で最も多く、使用頻度もほぼ同様である。その次に多いのが古仏語由来の語彙である点も共通している。1066年のノル

マン・コンクエストによって支配階級にフランス人が君臨して以降、15世紀頃まで宮廷を中心に上層階級や行政、商取引など公共の場ではフランス語、正確にはフランスのノルマン地方方言であるノルマン・フレンチが用いられていた。英語は被支配階級であるブリテン島の現地の人々の間で、一部の文書を除いては、話し言葉として用いられるに留まっていた。そのため、フランス語は当時、英語より高位の言語として目され、社会的地位の向上や大陸との商取引を望むブリテン島の中・下層階級の人々も習得しようと試みていた。¹² 逆に、ブリテン島へ移住してきた大陸の騎士などが、現地女性と婚姻を結ぶことで、その子どもたちは両親の言語である、英・仏語のバイリンガルとして育った。また、対外戦争による反フランス感情や、ベストの流行前後の教育改革など、政治・社会的な変動を背景として、土着語である英語が次第に外来のフランス語を吸収していくようになった。そして、13世紀後半から14、15世紀に至り、フランス語を主とした大陸言語の語彙を吸収、反映した Chaucer が生きた時代の中英語へとつながっていく。標準英語の基となったロンドン英語で、特に Chaucer が用いた語彙の20パーセントから25パーセントはフランス語由来のものだ。¹³ フランス語は、先ず、行政や宮廷に関する語彙、次に、日常語が流入してきた。その後は学問や芸術、文化に関わる語彙を中心とした借用語が見られ、フランス語はラテン語と同様に教養、高位の文化の言語として学ばれる存在となっていた。

町人 Symkin、学僧の Alayn と John の三者とも語彙の構成比としては、当時の中英語に則ったものである。しかし、Cambridge で学ぶ学僧であるはずの John と Alayn には、〈教養人〉というマーカーになるラテン語自体やラテン語由来の語彙の使用は見られない。“noble”を気取っているとはいえ、町人として高い教養は望めない Symkin 相手に、教養人であるはずの学僧二人の言葉遣いには、知性をあまり感じさせないことが見て取れる。むしろ、学僧二人に関しては、古ノルド語由来の語彙が古仏語由来の語彙に続いて使用頻度が高く、言葉遣いのレベルにおいては、学僧としての性格付けよりも、北部出身者であることが強調されていることが理解できる。

フランス語由来の語彙の使用頻度について、三者を比較してみると、Symkin は1.2行あたりに1例、次に John の2.4行、Alayn の3.8行と続く。Symkinの方が発言数は少ないにもかかわらず、学僧二人よりもフランス語系の語彙を多く使用している。統計的には、Symkin が高位、文化的な言語であるフランス語系の語彙を用いることで、彼の“noble”に対するこだわりを示し

ているように見える。しかし、それはあくまでも統計として推測できるものである。実際にどのような語彙を、どのような場面で用いているかを分析してみなければ、それらの語彙がいかに Symkin の性格形成に寄与しているかを証することはできない。

Symkin の科白の箇所と、各科白で用いた古仏語由来の語彙と意味をまとめたのが以下の表である。

表 (2)

① ll. 4024-5 >John, Alayn		無し	
② ll. 4034-5 >John, Alayn	4034	Fay	n.) faith
③ ll.4047-56 >soliloquy	4048	bigyle	v.) deceive, trick
	4050	Philosophye	n.) philosophy
	4051	Queynte	adj.) skillfully, contrived
	4053	bren	n.) bran
	4056	Art	n.) 'arts' curriculum in the university
	4056	counte	v.) value, account
④ ll. 4095-9 > soliloquy	4097	Art	n.) 'arts' curriculum in the university
⑤ ll. 4120-6 >John, Alayn	4121	part	n.) part
	4122	streit	adj.) narrow
	4122	Art	n.) 'arts' curriculum in the university
	4123	Argumente	n.) argument, rhetoric
	4123	place	n.) place
	4124	space	n.) space, room
	4125	place	n.) place
	4125	suffise	v.) please
	4126	gise	n.) manner, custom
⑥ ll. 4268-72 >Alayn	4268	false	ajd.) false
	4268	harlot	n.) rascal, fellow
	4269	False	adj.) false
	4269	Traitour	n.) traitor
	4269	false	adj.) false
	4270	Goddess dignitee	n.) God's sake
	4272	Lynage	n.) lineage
⑦ l. 4307	4307	Harrow	interj.) "Help!"

Symkin 用いるフランス語系の語彙は、日常語、生活に関するもの (counte, spcae, part など)、学問や知的活動に関するもの (bigyle, art, philosophie など)、宗教に関するもの (faith, dignitee)、罵り言葉 (false, traitour) などに大別できる。各分野の語彙が全体的に散じているというよりも、ある一定の話題や場面に即した分野の語彙が用いられている。具体的には、昼間の John と Alayn と挨拶を交わす場面 (①、②)、学僧二人を騙そうと計画する場面 (③、④)、宿乞いをする学僧二人に対する返答の場面 (⑤)、夜中に Alayn が Malyn と同衾したことが発覚し、喧嘩へなだれ込む場面 (⑥、⑦) に分けることができる。中でも、学僧達の会話と彼らを騙そうと画策する場面は、表裏一体のものとして、Symkin の教養人たちに対する感情と、その扱いを、語彙の使い方によって巧みに表現されている。

①～⑤の場面において用いられるのは、学問や知的行動に関する語彙が大半を占める。これらの語彙は Symkin 自身というよりも、学僧二人に属するように使われる。たとえば、“art” や “philosophye” には学僧を指す “hir” (4050, 56)、“his” (4097) といった所有格が先行し、“queynte” も “crekes” を形容する (4051)。学問や大学機構が名称と共に、大陸からブリテン島へ渡ってきたため、大学でそれらを学ぶ学僧たちに “art” などの語彙が共に使われるのは無理ない。しかし、“art” だけでも 3 回、その他知的な様子を表す語彙を彼らに対して繰り返し用いるのは、“Of al hir[clerks] art counte I[Symkin] noght a tare.” (彼ら[学僧たち]が学んだことなんて、自分 [Symkin] には種ほどの価値も無い) (4056) と言葉では表現しつつも、学僧たちに〈教養〉があることを認めざるを得ない Symkin の心境が表れている。それと同時に、高位な文化や知識に彩られた〈教養〉を持つ学僧や大学を出し抜き、フランス語由来の語彙を用いることができる自身の知恵と、“nobility” を強調する傲慢さと自信が滲み出ている。学僧たちを表現する知的な語彙は、Symkin のコンプレックスだけでなく、強力な皮肉も込められているのだ。特に、4054 行目では “The gretteste clerkes been noght wisest men” (最も賢い学僧は最も賢いものではない) と、学僧たちが用いるように格言を引き出し、Alayn が用いた “by my croun” (4041) – “croun” は、アングロ-ノルマン・フレンチ由来の語彙である – を、Symkin は策略の成功を確信して用いている (4099)。これらの科白は、Symkin が単なる気取り屋にとどまらず、〈教養人〉を追い越そうとする対抗心の持ち主だということを表している。

Symkin の対抗心と皮肉は表向きは穏やかに、それでも強烈に学生達へと当

てつけられる。Symkin は、John と Alayn の馬を野に放して後を追わせ、その間に穀物を盗みながら、自分の知恵が彼らに勝っている、とほくそ笑む。そして、馬を捕まえて疲れきった John と Alayn を嘲笑うかのように、彼らの〈教養〉に対する皮肉を更にぶつける場面が以下のものである。

The millere seyde agayn, "If ther be eny,
Swich as it is, yet shal ye have youre **part**.
Myn hous is **streit**, but ye han lerned **art**;
Ye konne by **argumentes** make a **place**
A myle brood of twenty foot of **space**.
Lat se now if this **place** may **suffise**,
Or make it rowm with speche, as is youre **gise**."
(4120-6)

Symkin は John と Alayn に対して、挨拶を交わす場面から一貫して敬称を表す二人称代名詞複数形 "ye-" form を用いる。(因みに、学僧二人は Symkin に対して、親称を表す二人称代名詞単数形 "thou-" form を用いる。) John が Symkin の家までの道のりを知っていることや、Alayn が妻や娘の様子に言及して挨拶をすることから、Symkin と学僧二人は以前からの知り合いだったことが窺い知れる。それでも Symkin が敬称を用いることは、学僧である〈教養人〉に対する敬意を表している。しかし、先述したように、Symkin が大学側に対して見下げるような感情も持っていることから、この敬称も表向きに過ぎない。更にこの場面においては敬称が5回も登場し、かつ、学僧たちの知識や学問と共に繰り返し用いられている。このことは、Symkin と相手である学僧たちの〈教養〉を境にした差異を際立たせ、Symkin の必要以上に丁寧な口ぶりを表現している。

また、Symkin がフランス語系の語彙を最も多く用いるのはこの場面である。語彙は学問に関するものに加えて、日常語にも及ぶ。Symkin は自分の家を「狭い」と謙遜しつつも、"stright" (4122) や "place" (4125) などフランス語系の語彙で表現する。とりわけ、古仏語に由来する "gise" (4126) は、*Sir Firumbras* や *Arthur and Merlin, Romance of the Rose* などのロマンス、John Lydgate の騎士道的な叙事詩や John Gower の *Confessio Amantis* といった作品に主に用いられる語彙である。高雅な雰囲気をもつ、そうした語彙を、町人で

ある Symkin がこの場面で用いるのは、場違いの感があるといえよう。このような語彙の使用が Symkin の気取った様子を示している。「学問で現実世界の無理を可能にしてみろ」、という無理難題を言って彼らの学業を皮肉りつつ、身分関係を意図する敬称の使用や語彙の選択からも、Symkin の慇懃無礼な傲慢さや、“noble” を鼻にかけた様子がその言葉遣いに滲み出ている。

Symkin は John と Alayn を騙し、彼らの〈教養〉に対する皮肉を浴びせて、己がプライドを満足させるが、逆に腹を立てた学僧二人によって娘と女房を寝取られ、プライドを打ち砕かれるような仕返しに遭う。Alayn が John だと勘違いして、Symkin に Malyn との同衾の様子を話す場面 (⑥) を引用する。この場面では、Symkin は怒りを爆発させて Alayn を罵るが、既に引用した学長の罵りと違い、フランス語系の語彙が連続している。

“Ye, **false harlot**,” quod the millere, “hast?
A, false traitour! False clerk!” quod he,
 “Thow shalt be deed, by Goddes **dignitee!**
 Who dorste be so boold to disparage
 My doghter, that is come of swich lynage?”
 (4268- 72)

間投詞 “Ye” や “A”、文章ではなく相手を罵る単語の連続、“hast?” に見られる主語や後続する動詞の省略など、Symkin の感情の昂ぶりが表現されている。今まで学僧に対して敬称の “ye-” form を用いていたが、この場面では突如、親称の “Thou” (お前) (4270) を用いて、相手への怒りを露わにしている。

しかし、感情的になって相手を罵る Symkin の言葉からは、依然として “noble” に対する執着と根深く染み付いた気取り屋の様子が、より強く押し出ている。感情の昂ぶりを表す間投詞 “A”¹⁴ や、Alayn を “false” だと糾弾する “harlot” や “traitour” といった語彙は、古仏語由来の語彙である。加えて、二重下線部の “disparage. . . swich lynage” (4271-2) という言葉には、Symki の血筋に対する強い自尊心が表現されている。“disparage” とは「名誉を汚される、不名誉である」という意味を持つが、特に、高貴な血統に低い血統の血が混じる、などの不釣り合いな関係によって品位を貶められることを意味する。¹⁵ 既に物語の冒頭で、Symkin と彼の義父である司祭が、Malyn を然るべき血筋の相手と結婚

させようと考えていることや、Symkin が自分と “noble kin” である妻の血筋にこだわっていることが示されていた。その血筋を改めて古英語由来の ‘kin’ という語彙ではなく、フランス風に “lynage” (4272) と表現することで、Symkin が自分たちの血筋をまるで王侯貴族の血筋であるかのように扱い、思い上がっていることを示している。

Alayn を罵る際に使われた “harlot” は、*Ancrene Riwe* や William Langland の *Piers Plowman* など宗教的な著作にも用いられており、Malyn の血筋を “hooly blood” (3985) と喩えた宗教的な色合いと重ね合う。“traitour” は「他人の妻や娘を寝取った者」に対する罵りを表す他に、「王侯貴族や上位のもの、社会的階級差に対する反逆や犯行」も意味することから、“noble” を汚す “disparage” に意味を重ねている。

Alayn を罵る場面において、Symkin は文法的な表現のレベルでは感情的になりながらも、言葉遣いにおいては、実際の町人としての地位には不釣り合いな貴族風を気取った語彙を用いている。Symkin の傲慢さが血肉に染み付いたものだということを、罵りの口調の強さと共に強く印象付けている。

2. John と Alayn

The Reeve's Tale における中心人物といえば、Symkin であろう。彼は冒頭でも詳細に外的な設定が語られ、物語の筋でも、Symkin を中心として事件が展開していく。しかし、底本と目される古仏語のファブリオー、*Le meunier et les .II. cler* では、粉挽きが中心人物だとは必ずしも言えない。Symkin が物語の中心に据えられるのは、語り手である荘園管理人の Oswald による、粉挽きに対する復讐が反映していると考えられる。それに加えて、齊藤勇は著書の中で、*The Reeve's Tale* が *Le meunier* や他の類話とは設定を異にする Chaucer の工夫について次のように言及している。

数ある類話のうちで、チョーサーのもののおもしろさは、そういう常套のアクションが、関係者の性格から生じる、ということである。…「荘園領理人の話」の中心人物は粉屋である。チョーサーが意図的にそうしたのだ。他の類話では二人のケンブリッジの学生にあたる泊り客が中心人物だが、チョーサーでは彼らはほとんど無性格に近く、ただその役割だけが面白い。それは中心人物たる粉屋の恥辱の引き出し役だからである。(89-90)

学僧二人、John と Alayn が Symkin が恥辱の引き出し役という点については頷けるが、彼らが「ほとんど無性格」だという斉藤の指摘については疑問を覚える。これは、悪党である Symkin を懲らしめる物語という、あくまでも Symkin を中心にした視点で学僧二人を捉えている。学僧二人は Symkin に見下され、騙されながらも、最終的に Symkin を出し抜いて懲らしめる、という役割をこなす程度の設定が加えられている、という理解までで留まってしまっている。若さや、当時、「滑稽」、「劣等」といった見方をされてきた北部方言¹⁶ 話者といった設定が John と Alayn の物語の中での重要性として従来指摘されてきた。たしかに、このファブリオー作品における学僧二人の役目は、Symkin をいかに屈辱的に懲らしめるか、ということが第一義だろう。しかし斉藤自身が述べているように、物語の展開が『関係者の性格から生じる』ように、Chaucer は登場人物に単なる「役」に留まらない個性を与えている。それは中心的な人物である Symkin だけではなく、John と Alayn にも当てはまる。Spearing は John と Alayn の性格的な差異について、それぞれの行動に基づいた指摘をしてはいる (52-6) が、彼らの発言等を北部方言に限らずに詳細に分析し、客観的な個別性を指摘するには至らない。

2. 1. 使用語彙の由来別分類による分析

改めて John と Alayn の科白に着目して、その個別性を分析する。以下の表は、二人の科白の中で使用されている内容語を語彙の由来別に分類したものである。

表 (3)

	OE	OE/ON	ON	OF	AN	nth.Dialects
John	125 語 /50 行 :1/0.4	6/50 :1/8.3	16:50 :1/3.1	21/50 :1/2.4	1/50 :1/50	50/50 :1/1
Alayn	140/46 :1/0.3	6/46 :1/7.7	7/46 :1/6.6	12/46 :1/3.8	3/46 :1/15.3	39/46 :1/1.2

(各語彙の語源別分類は内容語に限るが、nth, Dialects (北部方言) については機能語、内容語両方を分析の対象とした。)

学僧二人の出自である、“Strother, / Fer in the northe” (遙か北方にあるストローザー) (40145) を示すように、北部方言の使用、古ノルド語由来の語彙を使

用が認められる。^{17, 18} 先述したように、内容語としてラテン語系の語彙の使用が見られないことと、由来別の語彙の使用頻度の高さが古英語、古フランス語に次いで古ノルド語が高いことが挙げられる。このことから、彼らの言葉遣いには高い教養を持った学僧というよりも、北部出身者としての側面が強調されている。古ノルド語の使用率が John は平均として 3.1 行につき 1 回、Alayn が 6.6 行につき 1 回、北部方言の使用率が John は 1 行につき 1 回、Alayn が 1.2 行につき 1 回であり、John のほうが語彙のレベルでは北部的な言葉を使っている。しかし、全体的な方言の使用率は二人ともほぼ同じである。John の方が Alayn に比べて、北部出身であることがより強調されているということは無い。

この北部方言の使用について、Chaucer は必ずしも学僧二人にそれぞれの個性を付与することを目的にしたわけではない、と考えられる。Chaucer は *The Reeve's Tale* がファブリオーとして聴衆に語られる意義を意識して、他の類話とは異なり、学僧二人に「北部出身」という設定を加味したものと思われる。しかし、聴衆への効果や物語を盛り上げる要素を意識しつつ、その設定を二人の性格形成に活かすのが Chaucer の類まれなる人物描写のセンスの為せる業だろう。

2.2. 言語的分析による John 像

Spearing は John と Alayn の性格について、次のように説明している。

Alayn and John, the two students, make themselves known to us above all as an inseparable pair. . . . Though they function largely as a twin-like pair, we can perhaps detect certain differences of personality between them. Alayn is bolder and more confident: . . . John is more cautious . . . perhaps somewhat brighter . . . (52-3)

Alayn が Symkin に対して先に声をかけたことや、Malyn に対する直接的な夜這い行為、Symkin との乱闘を挙げて Alayn の積極性を指摘している。対する John は、Symkin は危険な人物だ、と警告をしていることや、Alayn とは対照的にベッドに留まろうとしていたこと、また、揺りかごのトリックを挙げて、慎重で多少は利口だと記述している。このような、行動によって推察できる二人の性格を科白のレベルからも検証する。

John と Alayn の科白の差異には、話をする場面と相手、誓言の使用、格言や引用文の内容の違いなどが挙げられる。John 単独の科白は 50 行、Alayn 単独の科白は 46 行ある。馬を追う場面 (4101-2) では二人のどちらの科白が明示されていないので、これは分析の対象から除外した。

John の科白は、Symkin の家を訪ねてから床に入るまでが中心であり、それ以降は Alayn に対する忠告と寢床の中での自問自答しかない。行数で表すと、日中は 36 行、日没後は 14 行になる。対する Alayn は、日中の科白は挨拶や John に対する返答に留まり、床に入った後から饒舌になる。行数では日中が 9 行、日没後が 36 行であり、二人は日中夜の科白の数において対照を為している。先に John の科白に関して詳細に分析していく。

Spearing が指摘したように、Alayn は先に Symkin に声をかけてはいるが、その後 Symkin と主に会話をするのは John である。また、Symkin の計略で馬を追いつけ回す破目に遭った後、更に浴びせられる皮肉に応じて、その夜の一宿一飯の交渉をするのも John である。Symkin が垣間見せる〈教養〉に対する対抗心に John はどのような態度を見せているだろうか。まず、John が Symkin に対して挨拶し、粉挽きの依頼をする場面を引用、分析する。

“Symond,” quod John, “by God, nede has na peer.

.....

To grynde oure corn and carie it ham agayn;
I pray yow spede us heythen that ye may.”

.....

“By God, right by the hopur wil I stande,”
Quod John, “and se howgates the corn gas in.
Yet saugh I nevere, by my fader kyn,
How that the hopur waggis til and fra.”

(4026-39)

Symkin が Alayn と John に “ye-”form を用いることは既に述べたが、Alayn は Symkin に挨拶する際、“thou-”form を用いている。対照的に、John は Symkin に対して “ye-” form を用いている。(下線部) “pray” と共に用いることで、相手に対して丁寧な依頼している様子を表している。また、Alayn は Symkin の妻と娘のことを伺う挨拶をするが、John は病気にかかった使用人に関して世

間話をしつつ、自分たちの来訪の理由を述べて丁寧に Symkin に依頼をしている。話の流れを作り、John が Symkin との間に波風を立てないように気をつけている慎重さが表れている。

John は Symkin の腕力に危険を感じてはいるものの (4188-91)、彼の町人であり、粉挽きとしての身分に対しては、自身の学僧の身分としての優越を感じていると見られる。Symkin に粉挽きを依頼した後、不正に横取りをされていないか確かめるために、John と Alayn は粉挽きの様子を観察すると言い出す。John は粉挽きで使う “hopur” が動作するのを今まで見たことがない、と述べる。この際に用いられる “by my father kin” は、誓言として文の意味を強調する役割を持つが、同時に自分の血筋について傲慢なこだわりをもつ Symkin への挑戦ともなり得る。誓言は中世期、日常的に用いられ、¹⁹ 必ずしも特別な意味を持つとは限らず、韻律を調節するために挿入されたことも考えられる。John は発言の中で 9 回誓言を使用する²⁰ が、その内 7 回は神やキリスト、聖人に言及し、その他の 1 回も “by my faith” と宗教的な言及である。俗世的な「家族」に言及するのはこの箇所しかない。John の出身について詳しい説明はなされていないが、あえて古英語由来の “kin” (血筋) を持ち出すことによって、自分の “linage” を尊ぶ Symkin の傲慢さを表立って攻撃することはせずとも、粉挽きとは無縁な自分の家柄をほのめかす John の自尊心が窺える。

次に、John と Alayn が Symkin の罠にかかり、更に “learned art” に対する皮肉をおつけられて、屈辱的な目に遭う場面を引用する。John はここで、Symkin にだけ言わせておかず、彼なりの〈教養〉をもって応えている。

“Now, Symond,” seyde John, “by **Seint Cutberd**,
 Ay is thou myrie, and this is faire answerd.
 I have herd seyde, Man sal taa of twa thynges:
Slyk as he fyndes, or taa slyk as he brynges.
 But specially I pray thee, hooste deere,
 Get us som mete and drynke, and make us cheere,
 And we wil payen trewely atte fulle.
With empty hand men may na haukes tulle;
 Loo, heere oure silver, redy for to spende.”
 (4127-35)

Symkin は“argumete”（弁論）や“art”で部屋の寸法を変えてみろ、という無理難題をもちかけてくるが、John は実際にそれが出来ずとも、相手の皮肉に応じて、格言（4129-30）や比喩（4134）（二重線部）を引いて交渉をする。つまり、John なりに“with speech”でもってこの状況を切り抜けようとしているのである。執拗に“ye-”form で呼びかける Symkin に対して、John は挨拶を交わしたときから転じて“thou-” form を用いる（下線部）。親称によって親しげに呼びかけて宿を借りようとする下心とも、相手の挑戦に応じた John なりの反撃とも取れる。そして、Symkin が古フランス語由来の語彙を並べ立てれば、誓言に北方の聖人である“St. Cutberd”²¹を持ち出し、格言にも北部方言（太字部）を多用して、自分が北部出身であり、学僧であることを強調している。当時の方言や出身地に対する意識やアイデンティティは、様々な論が飛び交ってはいるが、John の言葉からは自分の出身を肯定的、かつ Symkin の貴族風を気取った言動に対抗するものとして示していることが察せられる。

Symkin 自身に対しての発言ではなく、Alayn に対する発言や独白の中で、John は度々「愚か者」という言葉や嘲りの同義語を7回口にする。その語彙が出てくる科白と、語彙の由来、相手を「愚か者」だと思ふ主体とその対象をまとめたのが、以下の表である。

表 (4)

行	科白	語彙の由来	「愚か者」と思ふ主体>対象
4028	Or elles he is a fool , as clerkes sayn.	[OE]	clerkes, John > swayn
4089	Ilhayl! By God, Alayn, thou is a fonne !”	[?]	John > Alayn
4111	Oure corn is stoln; men wil us fooles calle,	[OE]	Men > John, Alayn
4202	Now may I seyn that I is but an ape .	[OE]	John > John
4206	And I lye as a draf-sak in my bed;	[ON]-[OE]	John > John
4208	I sal been halde a daf , a cokenay!	[OE]	felaws > John
4208	I sal been halde a daf, a cokenay !	[OE]	felaws > Johm

7回ある John が用いる侮辱の言葉のうち、単独で他人に向けられたものが病気になる使用人に対する“fool”（4028）と、納屋に馬をつないでおかなかった Alayn に対する“fonne”（4089）のみである。その他の例は John 自身に向けられている。John が自分の状況を鑑みて自虐的な発言をしている場面もあるが、Cambridge の“felaws”を主として、他者からの評価を予想して嘆いているのが目立つ。

Alayn は Symkin 一家が寝静まった後に、Symkin に対する直接的な皮肉や侮りの言葉を述べ、Symkin に貶められて負った損害を取り戻す、ということを経由して行動に移る (4169-87, 4192)。しかし John は、もし自分が何も行動を起こすことをしなければ、“I sal been hald a daf, a cokenay!” (自分は馬鹿で、ねんねだって言われる!) (4208) という、他者からの目を気にして行動に移る。*Le meunier et les .II. clers* では、John にあたる学僧は娘と同衾している相方を羨んで行動に移る。John も同じく Alayn を羨むが、そこでは自分の消極さに、自己を貶める言葉を用いて自己嫌悪を示し、同時に他者からの評価を気にするプライドの存在も加味している。こうして、John 個人の感情の動きがより具体的に示されている。

馬を捕まえて Alayn に愚痴を言う場面でも、Symkin に対する怒りよりも、同僚や学長、そして“... namely the millere” (特にあの粉屋) (4113) に“fooles”だと嘲りを受けることに対して嘆いている。自分より〈教養〉の劣ると思われる町人の Symkin に、“fool”だと侮られることの悔しさが“namely”で強調されている。これらの語彙に前後して、発言の頭に“allas”や“weylaway”などの間投詞、神の名を用いた誓言を述べていることから、John の感情の高まりが見られる。John が用いるのは、古英語由来の“fool”を主として、“draf-sak” (4206) や“daf” (4208) (おそらく“fonne” (4089) も²²) といった古ノルド語由来の言葉や北部方言であることは、Symkin が古フランス語由来の言葉で相手をも侮れるのと対照的である。

Symkin とは異なるプライドの高さと、面子を気にする John の性格が科白の中で繰り返し示されている。彼の言動が性格に起因するものであり、また逆に言動が彼の性格を具体的に示すものとして、この相互作用が聴衆に John という人格の現実味を持たせている。

2. 3. 言語的分析による Alayn 像

学術的で体面を気にする学僧としての側面を持つ John の活躍の場は、行動においてではなく、弁舌の場である。相手との直接的な対話、交渉を主とする日中に John の発言は集中する。対する Alayn の発言は夜中に集中する。John が“*And gif that he[Symkin] out of his sleep abreyde, / He myghte doon us bather a vileynye.*” (もしも、彼 [Symkin] がいきなり目をしましたら、/ 俺たち両方をとっちめるかもしれないんだぞ。) (4190-1) と、Alayn の行動と発言

に言葉短く忠告するも、Alayn はそれをものともせず、Symkin 一家への復讐の計画を長く述べる。(この科白は 19 行にも及び、作中最も長い科白である。) その後も、Malyn や John を相手にした発言や、独り言を繰り返すことから、Symkin を起こすことなど気にしない彼の大胆さが見られる。夜中に John の発言が少ないことは、Symkin を起こさないように用心している慎重さの現れとも考えられるだろう。

学僧二人はそれぞれ、自分の“speech”を示すが、内容はそれぞれの性格に応じて異なる。John が相手に直接言及しない皮肉や、術学的な格言の引用と北部的な語彙でもって Symkin に応対したのに対し、Alayn はより直接的な皮肉や嘲りをもって Symkin を非難し (4169-78)、“learned art”である『損害を受けたら、その補償を得る』(4181-2) という“a lawe”を復讐の正当化に用いている。John が引用したのは格言と諺であり、John の思惑や行動の目的を比喩的に示している。例えば、“With empty hand men may na haukes tulle” (『空手では鷹を誘き出すことはできない』) (4134) では、John が何も支払わずに宿を得ようとは思っていないことを暗に示している。しかし、Alayn が引用する“a lawe”には、既に損害(小麦を盗まれたこと)と補償(娘を寝取る)が Alayn 自身によって明示されており、そうしなければ気がすまない、という感情をストレートに表現している。更に、Symkin を“a flye”(蠅)とも思わない、とも言い(4192)、不敵さを示している。

Alayn の科白には、John のような一貫した語彙の選択や使用といった傾向や、術学的にほのめかした相手への攻撃性よりも、直裁的で自分の行動や感情をそのまま言葉にする単純さが表れている。

John は誓言を 9 回、Alayn は 5 回用いる。²³ 先述したとおり、日常的な挿入句として、文意を強調するために用いている。Alayn の誓言の使い方には、John が皮肉をほのめかして用いたり、出身地を強調したりするような使い方をしたのとは違った効果が見られる。Alayn が Malyn と同衾した後に、John (実際は Symkin) に自分の復讐が成功したことを報告する場面を引用する。

He seyde, “Thou John, thou swynes-heed, awak,
For Cristes saule, and heer a noble game.
For by that lord that called is Seint Jame,
As I have thries in this shorte nyght

Swyved the milleres doghter bolt upright,
 Whil thow hast, as a coward, been agast."
 (4262-7)

太字で示したのが誓言、二重線で示したのがそれぞれ強調している内容である。Alayn は、相手を騙すことや性的な話題について、キリストと聖人の名の両方を用いて、強調している。²⁴ 当時、Oxford や Cambridge での教育は主として神学であり、学者、学生は基本的に聖職者であった。²⁵ 聖職者であれば、妻帯や女性との性的な接触はタブーである。また、誓言は日常的に用いられていたとしても、神やキリストの名を濫りに口にするには抵抗があった。そのため、省略した文句や神の名ではなく身体の一部だけを用いたりする形が使われていた。²⁶ にもかかわらず、John も Alayn も特に省略した形で用いることは無く、Alayn に至っては聖職者にあるまじき行為を語るに際して、キリストの名を挙げている。Alayn の大胆さや不敵さは Symkin 個人に対するもののみではなく、社会的なタブーにも及んでいるのが言動に表れている。

Alayn の人格として、単純さや大胆不敵さのみが強調されるだけではない。同衾した Malyn との別れの言葉を交わす場面では、Alayn の違った一面を見せている。北部方言の使用やバーレスク²⁷ の例として、この場面は示されることが多い。

And seyde, "Fare weel, Malyne, sweete wight!
 The day is come; I may no lenger byde;
 But everemo, wher so I go or ryde,
 I is thyn awen clerk, swa have I seel!"
 (4236-9)

"noble" な血筋の娘だと思われている Malyn に対して、ロマンスにおける恋人同士の後朝の別れを Alayn は演出する。だが、既に随所で指摘されているように、Alayn は結びの行で北部方言を用いてロマンスの雰囲気の様子を狂わせている。この北部方言のみならず、Alayn の発言にはフランス語系の言葉は "clerk" を除いて全く使われておらず、宮廷風の趣にまでは至らない。対する Malyn は、Alayn を "lamman" (愛する人) (4240) と呼びかける。更に、涙を目に溜めながら Alayn 達から盗んだ小麦で作ったパンの在り処を彼に伝えて、別れ

を告げる。(4340-7) 彼女の様子からは、Alayn が Symkin 一家に “he folur of il endyng” (最悪の結末) (4174) をもたらそうとしている意図を知らないと思える。

Alayn の言葉は、Symkin がこだわる “noble” な血筋をもつ村娘の Malyn をからかい、皮肉なものなのだが、それに Malyn は気付かない。彼女に気付かせないばかりか、巻き込んで後朝の別れを演出させる程の演技力や、それなりの魅力も Alayn は持ち合わせていると思われる。この会話も含めて、Malyn から “esement” を得た Alayn は、積極的な行動力と共に、遊び心も持った人物として描かれている。

3. The Reeve's Tale の娯楽性

Chaucer は Symkin、John、Alayn に行動だけではなく、科白にもそれぞれの個性を反映させ、各個人を生き活きと描いている。しかし、冒頭でも述べたように、Chaucer は登場人物の各々を極めて現実的な一個人として描きたいがために、彼らの行動や発言に文体上の演出を加えた、というわけではないだろう。むしろ、*The Reeve's Tale* を鑑賞する読者、とりわけ、聴衆を意識していたに違いない。ファブリオーの定義を確定することは難しいが、中産階級を中心に、上中下様々な階級の人々が登場する、生活を中心とした娯楽的な韻文作品群である、と言えよう。²⁸ *The Reeve's Tale* の基にはファブリオー作品があり、やはり「娯楽」や「滑稽」といった要素が影響していると思われる。Chaucer はその娯楽性を、単に物語のプロットだけに求めたのではなく、言語的な効果にも求めた。そして、登場人物の行動や発言に文体的な個別性を与えることで、それぞれの場面を盛り上げつつ、同時に彼らを単なる「役割」から、一貫性を持った「人物」として描いたのだ。

たとえば、Alayn による Malyn に対する後朝の別れにおいて、ロマンスを装いつつ、フランス語的な語彙の代わりに北部方言を用いた場面は、聴衆にとって笑いを誘うものとなったのではないだろうか。北部方言自体に対する娯楽性というものに関しては、様々な見解があり、²⁹ 必ずしも北部方言であるからこそ「笑い」につながったとは限らないだろう。物語の流れがあり、その流れの中で、この場面が宮廷風ロマンスの様々な要素を変換しているところに、Alayn と Malyn のやりとりの滑稽さがある。

まず、状況的な置き換えに着目する。Alayn は騎士ではなく一介の学僧であ

る。しかも、彼が Malyn に近づいた意図は恋慕ではなく、Symkin に対する復讐心のためである。相手役の Malyn は高貴な血筋とされているが、そもそも彼女の祖父は司祭であり、聖職者の妻帯は許されていないために、その娘である Malyn の母も Malyn も決して誇れるような血統ではない。いくら父の Synkin 自身に経済的な余裕等があっても、身分は一介の粉挽きであり、Malyn はロマンスにおける姫君からは程遠い。典型的なロマンスにおける王侯貴族の配役が、社会的に反する背景を持つ学僧と村娘に置き換えられてしまっている。

次に、言語的な置き換えを見てみる。ロマンスもファブリオーも大陸由来の文学だが、Alayn はフランス語由来の言葉を用いず、更に地理的には宮廷から遠く離れた北部の英語を用いて、ロマンスの世界から離れていく。この作品が朗読されたことを想定すると、Alayn の北部方言は、フランス語とも、Chaucer が普段用いるロンドンの英語とも異なる響きを持ち、より違いが際立っただろう。

The Reeve's Tale 及び、*The Canterbury Tales* の聴衆がどのような人々であったかについて決定的な証拠はないが、Chaucer が宮廷に仕えていたことを考えると、主に宮廷に出入りする上流階級の人々や、その他宮廷人であったと考えられる。そのような人々であった場合、社会的な知識や教養もあり、ロマンスを嗜んでいたことも考えられる。彼らの知っている典型的なロマンスの一場面が、登場人物や内容だけではなく、言語的な要素においても裏切られていくことで、聴衆の笑いを誘ったのではないだろうか。

おわりに

以上、*The Reeve's Tale* 自体のファブリオー作品としての性格と共に、各登場人物の性格描写を各場面の内容と言語的な要素の相関性という視点から検証した。その結果を踏まえ、Symkin、John、Alayn の各登場人物はそれぞれの設定に沿った、基本的な文体的個別性だけではなく、それぞれの置かれた状況において彼らの性格に即した言動を行っていることが見られた。その言動が物語の展開を盛り上げると同時に、それぞれの個性を表現していることが理解できた。

従来、*The Reeve's Tale* における Chaucer の写実性や言語的センス、また娯楽性の演出の効果は、主として北部方言に依存するものと考えられてきた。しかし、*The Reeve's Tale* の中で娯楽性と写実的な特徴を担っているのは、北部

方言だけではない。あくまでもそれは一つの要因でしかない。John と Alayn はそれぞれの性格に合わせて、北部出身の学僧という設定に基づく知識や言葉遣いを用いている。このファブリオーの中心人物である Symkin も伝統的、社会的な〈粉挽き〉としてのイメージを基におきながら、一物語の展開を担うに相応しい感情や行動を科白と共に表現している。

Symkin と John の強烈な皮肉の応酬や、Alayn と Malyn の滑稽な後朝の別れなどは、とりわけ Chaucer が趣向を凝らした場面だったのではないだろうか。これらの場面は現実的というよりは演出的である。Symkin がフランス語系の語彙を織り交ぜ、気取った慥慥無礼な口調で相手の〈教養〉を皮肉れば、John は北部方言を盛り込んで〈教養〉をひけらかす。騙した者と騙された者が、言葉のやり取りにおいてもどちらが優越になるかを競い、John と Symkin の個性がぶつかり合う場面である。しかし、John は学僧でありながらラテン語ではなく北部方言に依拠して相手に挑んでいる。対する Symkin もフランス語系の言葉を使っているが、一介の町人でしかない。つまり宮廷にいる聴衆には、二人の自尊心の基が自分たちよりも低い位置にあることを言葉遣いと人物描写から読み取り、彼らの争いに優越的な笑いを感じただろう。

Alayn と Malyn の後朝の別れは劇中劇のような、とりわけ芝居がかった演出がなされている場面である。ロマンスにおける登場人物を気取りながらも、Alayn と Malyn はロマンスの主人公たちに身分も言葉遣いも遠く及ばない。この場面において、聴衆たちは言語的にも状況的にも不適切なロマンスの模倣におかしみを感じたと思われる。

本作品のそれぞれの場面は滑稽譚として、聴衆に愉快さを与えることを強く意識して編まれたものだろう。それでも、各場面での言葉のやり取りに違和感はなく、登場人物の言葉に一貫性も感じられる。登場人物一人ひとりの科白や行動がそれぞれの性格から起こるものであり、また逆に、彼らの心理を科白や行動に示すことで、人格をより具体的で現実味のあるものとしている。これは、Chaucer が文体的なレベルまで各登場人物に個別性を持たせて人物形成を行い、物語を展開させたことによるとあってよいであろう。ファブリオーというジャンルの意義と、登場人物の生き活きとした描写を両立させる Chaucer の“dramatic realism”こそが、時代を経ても *The Reeve's Tale* に読者をひきつける魅力となっている。

Notes

* 本稿における、*The Canterbury Tales* 本文の引用は、Benson 版に依拠する。

* 引用文中の下線、太字、[] による補足、日本語訳は全て筆者による。

¹ See Dryden 223-4.

² “The ‘realism of Chaucer’s fabliaux, as we shall see later, can go remarkably far, but it is very different from the realism or naturalism of the nineteenth-century novel. . . That aims at a kind of neutrality in its presentation of the detail of real life; whereas the realism of the fabliaux is ultimately based on an aristocratic conception of lower-class life as comic” (66).

³ *Le meunier et les .II. clers* はベルンとベルリンに写本が残っている。Bryan には、両写本と *The Reeve’s Tale* が対照できるように収録されている。

⁴ “Chaucer’s most striking means of characterizing the two students is their northern dialect, and this is a major innovation on his part – there appears to be no earlier English example of the use of dialect such a purpose.” (53-56)

⁵ *Le meunier et les .II. clers* の類話として、Boccaccio の *Decameron* の第九夜の六話、Jean de la Fontaine の *Contes et Nouvelles* にも『揺りかご』という作品が収められている。Cf. 松原 151-170, Spearing 22-23.

⁶ 斎藤 65.

⁷ Cf. *MED*, s.v. *pecok*, n. b: *mek* as a ~, *proud* as (ani) ~; *moustre of pocokes*, a group of peacocks; *vou* of the ~, a knightly vow, made on a peacock, to perform some noble deed; also, the title of the French poem, *Les Voeux de Paon*, by Jacques de Longuyon; *maken avoue* to ~; *pullen* a ~, to pull out the feathers of a peacock, *subdue* a proud person; “*pecok*” の比喩表現についての考察は、Friedman 11-12 を参照されたい

⁸ See *MED*, s.v. *yeoman*, n. 2: A member of the landholding class below the rank of squire; a man holding a small landed estate; also used as a title after a name.

⁹ Emden 524: “Both universities [Oxford and Cambridge] experienced severe troubles, sometimes due to bitter disputes with towns people over rents and the price and quality of victuals, sometimes to internal disorder caused by student factions. . . Nowhere else in England were townsmen required to accommodate a large extraneous concourse of clerks who had everything to buy and nothing to sell.”

- ¹⁰ Cf. *MED*, s.v. *curteis* (adj. & n.) 1: (a) Of persons: courtly or refined in manners; well-bred, urbane; polite, courteous; considerate, kind; ~ and hende; (b) of behavior, actions, words, etc.: refined, well-mannered, polite.
- ¹¹ 語彙の由来は Davis を参考に分類し、掲載のない語は *MED* を参考にした。
- ¹² Cf. Baugh 114-5.
- ¹³ 参照ブラッグ 80.
- ¹⁴ Mustanoja 623: “‘A’ – From OF and L *a*; capable of expressing with a wide range of emotions, such as surprise, admiration, regret, disappointment, dislike, scorn, joy and grief.”
- ¹⁵ See *MED*, s.v. *disparage*, v. 1: To degrade (sb.) socially (i.e. for marrying below rank or without proper ceremony); ~ blod, disgrace one’s family; Spearing 108: “417. to *disparage* ‘as to dishonour’; specifically, *disparage* is to degrade by making an unequal match.”
- ¹⁶ 当時の方言に対する見方は、議論が分かれている。John Trevisa による Ranulf Higden の *Polychronicon* の翻訳の中にはヨークの方言に関する記述がある。“Al þe longage of þe Norþhumbres, and specialliche at 3ork, is so scharp, slitting, and frotyng and vnschape, þat we souperne men may þat longage vnneþe vnderstonde” (163). しかし、この記述が全体的な北部方言に対する当時の見方とも限らない。Spearing 53 や Muscatin201-202 は北部方言が当時、南部から見て “inferior” だったものであろう、という見解を示している。ブラッグは南部人の北部人に対する恐怖心の延長として、相手を恐れつつ見下して笑う態度になり、更に時代が下って経済的、社会的、文化的、そして発音の優越に代わっていったのでは、という提言を示している。(ブラッグ 86).
- ¹⁷ Chaucer は北部方言の演出として、通常 o/oo と記述する音を古英語的な *ā* (記述では a/aa) に置き換えている。古英語の *-lc* の音 (記述では *-lch*, *-ch*) を *-lk* に置き換えている。*shall* は *sal* になっている。また、動詞の活用では三人称単数、複数の現在形、及び直説法の活用語尾を *-(e)s* にしている。(中部英語では *-(e)th*) 一・二人称単数、現在形の *be* 動詞を *is* で受ける例もあるが、二人称に *is* を適用するのは不正確だという指摘もある。(Cf. Davis 80: “is”) この他、所有代名詞 *thair* の使用、北部方言の語彙が見られる。北部方言に関する説明は、Benson 85 及び Barrow 6 に依った。
- ¹⁸ 北部方言使用の具体例として、John と Alayn が台詞中で使用した北部方言

を挙げる。

John: has(4026, 4027, 4203, 4204), na (4026, 27), bose (4027), sayn (4028), hopes (4029), wanges (4030), swa (4030), werkes (4030), I is (4031, 4086, 4202), ham (4032), heythen (4033), howgates (4037), gas (4037), waggas (4039), til (4039, 4110, 4110), banes (4073), atanes (4074), alsua (4085), sal (4085, 4087, 4129), raa (4086), waat (4086), fra (4086), wight (4086), bathe (4087, 4112, 4202), pit (4088), lathe (4088), Ilhay(4089), thou is (4089, 128), taa (4129, 30), twa (4129), fyndes (4130), slyk (4130, 4130), brynges (4130), tald (4207), halde (4208) (計 50 例)

Alayn: y-fayth (4022, 4044), fares (4023), swa (4040, 239), falles (4042), sal (4043, 4174, 4176, 4182, 4185, 4187), I is (4045, 4239), ille (4045, 4174, 4184), whilk (4078), geen (4078), wrang (4152), sang (4170), slyk (4170, 4173), ymel (4171), swilk (4171), wha (4173), na (4175, 4183), lange (4175), tydes (4175), says (4180), gif (4181), neen (4185, 4187), sale (4187), awen (4239), ga (4254), makes (4254), saule (4263) (計 46 例)

¹⁹ See Mustanoja 634: "Oaths and imprecations are also – from the point of view of function – comparable to interjections. In the ME period oaths were extensively used in everyday speech as corroborative elements."

²⁰ John が作中で使用する誓言は以下の通りである : by God (4026, 4036, 4089), by my fader kyn (4038), for Goddes banes (4073), for Cristes peyne (4084), By Goddes herte (4087), by Seint Cutberd (4127), by my faith (4209)

²¹ St. Cuthbert はスコットランドのリンディスファーンの司祭。遺体はダラム大聖堂に葬られたとされている。

²² "fonne" の由来に関して、Davis は不明、Tolkien は "northern and north-midland word" と説明している。(Cf. Tolkien 25.)

²³ Alayn が作中で使用する誓言は以下の通りである : by my croun (4041), By Goddes sale (4187), by God (4252), For Cristes saule (4263), For by that lord that called is Seint James (4264)

²⁴ St. James について、Spearing や Benson は当時一般的な聖人であり、Alayn がこの場面で名前を挙げるのには特別な意味は込められていない、という一律の見解を示している。St. James の名が用いられた理由として、脚韻の符合が最もらしいものとして考えられる。

²⁵ See Emden 523.

- ²⁶ Mustanoja 636 及びブラッグ 85-6 を参照。
- ²⁷ バーレスクの説明として、M.H. Abrams は、“an incongruous (馬鹿げた模倣)”として真面目 (serious) な作品、もしくはジャンルを、滑稽な表現でもって娯楽的に模倣したものと説明している (35)。斎藤 117-119 も参照せよ。
- ²⁸ ファブリオーの定義、説明に関しては、松原 13、斎藤 80-81 及び Spearing 13-16 に依った。
- ²⁹ 16 に関連して、方言使用の効果や意図も研究者によって様々な見解が示されている。Spearing は北部方言が 14 世紀の南部出身者にとって “inferior and comic” だったという見方に基づいて、北部方言を話す学僧による Symkin への侮辱の効果を増すことなどを挙げ、“comic” の側面を強調している (53-56)。Muscatine も Spearing と同様の見解を示し、“the emphasis of the Reeve’s Tale is such that it presumes in the clerks’ speech an indication of social inferiority. That the miller’s wife and daughter are ultimately *swyved* is comic.” と述べている (202)。また、Machan は John たちの北部方言使用を、言語的な差異によるコミュニケーションの断絶、社会の分裂の危険性を示唆している、と従来とは異なる興味深い見解も述べている (134-5)。

Bibliography

Primary Sources:

Chaucer, Geoffrey. *The Reeve’s Tale. The Riverside Chaucer*. Ed. Larry D. Benson. 3rd ed. Christopher Cannon. Oxford: Oxford UP, 2008, c1987. 77-84. Print.

Secondary Sources:

Abrams, M. H., and Geoffrey Galt Harpham. *A Glossary of Literary Terms*. 9th ed. Boston: Wadsworth Cengage Learning, c 2009. Print.

Baugh, Albert Croll, and Thomas Cable. *A History of the English Language*. 5th ed. London: Routledge, 2002, c2005. Print.

Bryan, W. F. and Gernmaine Dempster eds. *Sources and Analogues of Chaucer’s Canterbury Tales*. New York: Humanities, 1958.

Burrow, J.A., and Thorlac Turville-Petre. *A Book of Middle English*. 3rd ed. Malden, Mass: Blackwell, 2005. Print.

Davis, Norman, Douglas Gray, Patricia Ingham, and Anne Wallace-Hadrill. *A*

- Chaucer Glossary*. Oxford: Oxford UP, 1979. Print.
- Dryden, John. "Preface to the Fables." *English Critical Essays (Sixteenth, Seventeenth, and Eighteenth Centuries)*. Ed. Edmund D. Jones. London: Oxford UP, 1922. 206-36. Print.
- Emden, Alfred. B. "Leaning and Education." *Medieval England*. Ed. Austin Lane Poole. Vol. 2. Oxford: Clarendon, 1958. 515-540. Print.
- Friedman, John Block. "A Reading of Chaucer's *Reeve's Tale*." *The Chaucer Review* Vol. 2. No. 1. (Summer, 1967): 8-19. 28 November 2010. Print.
- Machan, William. *English in the Middle Ages*. Oxford: Oxford UP, 2003. Print.
- Muscatine, Charles. *Chaucer and the French Tradition : A Study in Style and Meaning*. Berkeley: U of California P, 1965. Print.
- Mustanoja, Tauno F. *A Middle English Syntax*. Helsinki : Société néophilologique. c1960. Print.
- Spearing, A.C., and J. E. Spearing, eds. *The Reeve's Prologue and Tale with the Cook's Prologue and the Fragment of His Tale from the Canterbury Tales*. By Geoffrey Chaucer. Cambridge: Cambridge UP, 1979. Print.
- Tolkien, J. R. R. "Chaucer as a Philologist: *The Reeve's Tale*." *Transactions of the Philological Society* 33 (1934): 1-70. Print.
- Trevisa, John, trans. *Polychronicon*. By Ranulf Higden. *Polychronicon : Together with the English Translations of John Trevisa and of an Unknown Writer of the 15th Century*. Ed. Churchill Babington. Vol. 2. Longman, 1869. *Google Books*. Web. 28 Nov. 2010.
- 菊池清明「*Sir Gawain and the Green Knight*における登場人物の文体的個性について」*Studies in Medieval English Language and Literature*, No. 3, (1988): 57-84. Print.
- 斎藤勇『*カンタベリ物語：中世人の滑稽・卑俗・悔悛*』東京：中央公論社, 1984. Print.
- 高宮利行, 松田隆美編『*中世イギリス文学入門：研究と文献案内*』東京：雄松堂出版, 2008. Print.
- メルヴィン・ブラッグ『*英語の冒険*』三川基好訳, 東京：アーティストハウスパブリッシャーズ, 東京：角川書店, 2004. Print.
- 松原秀一『*西洋の落語：ファブリオーの世界*』東京：東京書籍, 1988. Print.

Chaucer's Realism in *The Reeve's Tale*

Asumi Tamakawa

Abstract

John Dryden called Geoffrey Chaucer "the father of English poetry" in his *Fable, Ancient and Modern*. He admired Chaucer's comprehension of humankind. Chaucer wrote various men and women in the *Canterbury Tales* not only as pilgrims to Canterbury, but also as characters in their tales. His descriptions of the characters are so realistic and lively that they have made its readers believe that they might have lived in the real. Chaucer might not have a sense of "realism" or "naturalism" of the nineteenth century, but expressed a different "realism" as a man living in the Middle Age. *The Reeve's Tale* in the *Canterbury Tales* is a fabliau. The medieval "fabliau" was a short comic tale in verse dealing lives of middle-class or lower-class characters. *The Reeve's Tale* is based on the old French fabliau, *Le meunier et les .II. clers*. Chaucer sophisticated the plot, the characters and their linguistic features more than the original fabliau. J.R.R. Tolkien, Charles Muscatine and other scholars have considered the use of Northern dialects of two clerks as the primary feature of *The Reeve's Tale*, and they have admired Chaucer as a pioneer who used a dialect for characterization in the tale. However, it is neces-

sary to study not only the apparent features, such as the dialect and the plot, but the linguistic features of the characters to understand the elaborateness of the descriptions in *The Reeve's Tale*. The purpose of this paper is to reassess how Chaucer succeeded both in making his tale dramatic and comical as a fabliau and in characterizing Symkin and two clarks as realistic "individuals."